同窓会だより

第 2 号
昭和55年 8 月17日
静岡県立磐田南高等学校同窓会
印刷　総合印刷（株）大進堂

変らぬもの

校長　安間祐一

本校は開校以来五十八年を経過して、卒業生総数一二、七〇八人を数え、各卒業生は、時代の風潮を反映して、その時々の特色ある学校生活を過ごされ、思い出もまた様々であると思います。学校の風貌は変りましたが、創業時代の学校精神は一貫して継承され、いまの教育方針となり、学校の歴史そのものが校訓として生徒に訴え続けています。語り伝えられる作業教育の凝集である防風堤は、厳然として、運動場で活動する生徒を見守っています。そして、ここに陣取って、まず新入学生に緊張と新鮮な感銘を与える校歌練習も変らぬ新学期の風物詩です。

多くの学校が、新制高校への切替えと共に、校歌を改制していますが、本校の校歌は伝統を守り、ほぼそのまま継承しています。校史を見ますと、昭和四年二月校歌を制定発表、と記されています。戦後の高校移行に当たって、歌詞を数文字改めていますが、曲譜も全く変ることなく、五十年以上にわたって歌いつづけられていることは、見中、磐南高の継続性、一体性のために、大きな意義があると思います。その歌詞には、学校の理念が込められて、生徒の成長の指標となり、そのメロディーは生徒の情操を育くみながら、今後も永く、磐南高生を鼓舞し続けてゆくものと思います。

同窓会の今昔

校内幹事　池谷幸平

これからの同窓会は、会員に対して如何に有益な会であるか、またどのようなサービスがなされるかによって評価される時代になった。また学校主体から会主体に成長しつつあるが、会員自身も会を発展させようとする意識が必要である。

過去の資料を参考にして、運営について考察してみたい。

◎会費　昭和四十一年迄は年額納付制であったが、実際はなかなか面倒な事であった。昭和四十二年に規約を改正し、終身会費制とし今日に至っている。入会金は一般会計に、終身会費は特別会計として別途積立ている。一般会計の積立金は、当面（二年）五〇〇万円に増額し、利息で年次と支部の運営費および総会費を助成したい。終身会費は、当面一、五〇〇万円・中期（十年）として五、〇〇〇万円を目標にしている。募金に頼らず事業を拡大して行くには、専任の事務局職員を置ける体制を考えなければならない。

◎事業活動　同窓会規約では、①会誌・名簿の発行　②会員および客員への弔慰　③講習会・講演会の開催　④母校教育の援助　⑤PTAとの協力　⑥その他必要と認める事項となっている。見中時代は、①～②が主体で、戦後の南高時代は後援会的性格が強く④に重点が置かれていた。公立高校の施設費は、公費で賄われるので建築費への寄付金はもう必要ないであろう。今後は、会員を主体に事業を計画して行けばよい。

◎総会　尾崎校長が会長をしていた見中時代の総会は、四〇～六〇人の出席があった。南高時代になってからは、高校卒業生の出席は少なく年配者が三〇～四〇人出席するだけのさびしい総会であった。総会の出欠状況は、同窓会活動の質量に比例するものであり、役員諸氏の活動に左右される。昭和四十五年以降は、魅力ある総会をモットーに、この年から総会担当年次を高一回生から始めることとし、企画運営をお任せすることになった。おかげで年々盛大になり今日に至っている。今後の方向としては、出席人数の割当て・会費等について問題点を改善してゆかなければならない。

会費及び決算額の推移

		昭和10年	昭和15年	昭和20年	昭和25年	昭和30年	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和54年
会費	入会金	5	5	5	100	100	200	200	500	1,000	2,000
	年会費	50銭	50銭	50銭	50	100	100	100	0	0	0
	終身会費	0	0	0	0	0	0	0	500	2,000	2,000
決算額	総収入	783	817	535	19,700	52,000	78,000	118,000	597,000	1,465,000	1,856,000
	総支出	423	464	414	9,100	43,000	48,000	107,000	486,000	615,000	787,000
	資産額	1,300	3,494	4,569	22,000	173,000	201,000	1,160,000	2,253,000	7,640,000	14,886,000
事業	①	会誌6号	会誌						生徒と懇談	女子部会	機関誌
	②		香料 42	香料 145				はぐま会助成	年次活動	年次運営費	名簿発行
	教育助成				3,000	9,000	15,000	14,000	60,000	46,000	10,000
総会	会費	0	50銭		30	100	200	300	1,000	2,000	3,000
	会場	図書館	図書館		図書館	図書館	図書館	図書館	体育館	グランドホテル	グランドホテル
	出席人員	90	37		39	55	67	29	210	280	400
	内容	会食・余興	茶話会		議事・会食	議事・余興	議事・会食	議事・会食	パーティー	パーティー	パーティー
	補助金	27	20		2,000	15,000	12,000	6,000	150,000	150,000	150,000

（単位円）

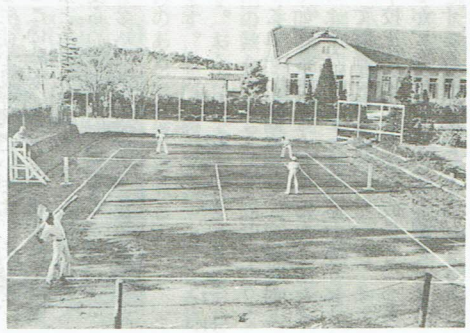
わが年次

南高第二回生

青島正司

私達は、昭和十九年四月、旧見付中学校に入学したのですが、当時は小学校からの受験で、五年生まであり、五年生と云うと本当に大人のような感じで、こわかったものです。一クラスは四十七・八名、四クラスありました。三年生以上は三クラスでした。初めて入学通知（当時二銭の葉書で、三月二十六日の消印があります）が来た時の嬉しさは今も忘れられません。文書は、入学許可のあとに、「追而来ル四月四日午後一時入学式挙行可致ニ付、父兄附添ヒ御出頭相成度、尚ホ當日無断欠席セル者ハ入学許可ヲ取消スコトアルベシ」とあり、今流に「……学校長……」とある所に、「静岡県立見付中学校」とだけ印してあり、ガリ版刷りでした。

私達の学校生活は、高校一回の方達と略々同じで、旧制中学で終った者（二十四年卒）と、もう一年居れば新制高校卒（二十五年）になると言うので、それまで居た者、二年生の頃陸軍幼年学校を受けようとした者、四年の時、旧制の高校を受けた者など、いろいろありました。現在は、大学の教授・高校長・医師・その他、各方面で結構活躍しています。或る人は、私達の年代の特色として俳優の名をあげ、「どんな明かるい役をやっても、精力的に動いても、どこかに陰がある。口で云うより、背中で語る役が向いている」と云い女優の八千草薫・山本富士子などをこれに続く、有馬稲子・岡田茉莉子と対比していますが、案外的を得ているのかも知れません。



十九年八月になると、学徒動員令は、中学生全員に発令され、学業を捨て、農村や工場に出動する一方、学校の留守部隊の役目も課せられました。東南海地震のあったのもこの年です。それから、今の静大跡地に当時第百二十九部隊と云う通信隊があり、一日入営と云う軍隊生活の見習いもしました。二十年敗戦となり上級生が帰校し、二十二年の学制の改革などで、私達の生活も目まぐるしく変化します。私達の方が多少順応性があったかも知れませんが、先生方のご苦心は大きかったと思います。戦中から居られた先生方が二十一年頃を境に多数移動されました。ですから、私達の卒業時まで通して見えられた先生が思ったより少なかったのです。既にご他界された恩師も多いのですが、その点、今もご健在で、私達を見守って下さる先生方が居られるのは有難いことです。在校中に校長も佐野、皆川、飯田とお三人も変られたのです。新制になり女性徒も入って来ました。校舎が必要となり、旧部隊の兵舎を貰い受けて運搬したのもこの頃でした。今はそれも無く、残るは記念館と、剣道場、それに兵器庫だけとなりました。新聞紙のような教科書も今は思い出です。言ってみれば私達の時代は、戦中戦後の急変期を経験し、本当に迷い多い時代でした。然しその中にあって陸上の活躍など、次の時代への敷石であったのかも知れません。

南高第十一回生

大橋　忍

”霊峰　富士に朝日照りそい“我々同期二百五十余名が南高の門をくぐったのは、昭和三十一年の春であった。その当時は校舎も現在のような立派なものではなく、兵舎を改造したものであったが、念願の”南校入学“の、自負から、校舎の古いこと等問題にならなかった。当時は受持担任が一年から三年迄変らず、一組が中村末吉先生・二組が秋山正夫先生・三組が岩田譲先生・四組小沢卓郎先生・五組石原弘也先生・六組寺田三二美先生の布陣であった。入学当時は、女子の制服はなく、多分その年の七月頃制服が出来たと記憶している。一クラス女子が五名～七名程度で、貴重な存在でもあった。

一年当時の「小田原山」での応援歌の練習は恐怖の連続であったが今にして思えば、懐しいものである。在学中のハイライトは、何といっても、中村淳君率いる陸上部であった。全国大会準優勝（優勝の本命であった）の記憶は今でも、ハッキリと覚えている。この年の陸上部は、早くから、インターハイの優勝候補校として、名前が出ていた。四百・八百メートル、リレー、百メートル、二百メートルの短距離。ハードル、円盤、三段とび、ヤリ投等、いずれも優勝の本命と、されているものや、上位入賞が見込まれるものが、数多くあった。又、一年後輩の井指正之君（現在菊川、井指産業専務）はその中でも特に、クローズアップされていた。その当時の部員に、長谷川由和君、柏原修君、田中幸男君、宮野紀夫君等、現在でも各方面に於て活躍している面々である。磐田駅での壮行会には、三百人余りの見送りがあり、いやが上にも、ムードは盛り上がっていた。小生もその時激励の言葉を述べた一人である。大会でも激戦に次ぐ激戦で岐阜の長良高校に優勝をさらわれ、わずかな得点差で準優勝となったが、その健斗振をたたえる為め多くの人達が、駅迄迎えに行ったものである。このようなかがやかしい戦果のあと、恩師の、伊藤菊造先生が、三十三年十月二十一日に、栄えある、秩父宮賞を、受賞され、私共も全校生徒、全市民と共に、喜びをわけあったものである。

又、生物部の「鈴木梅太郎賞」受賞は、我々同期の誇りでもあった。現在評議員として活躍している、長谷川寿一君等は研究用の「メダカ」さがしに東奔西走したものである。研究用のメダカは延百五十から二百利用したが、研究用の材料とはいえメダカの御難の年であったと思う。鈴木梅太郎賞受賞の研究テーマは、「メダカに対する塩類の影響」であった。

校内体育祭では、名物ヤグラが並び高さを競い合ったものであるが、建築に手抜きがあって、倒壊したものが、度々あったが、しかし不思議と怪我をした者は、なかった。従来のクラブに加えて、山岳部が復活し、音楽鑑賞部が出来たのも高校三年の年である。

ひたむきに、走り続けたこの高校生活が、今では心良い清涼感として青春を語れる昨今である。

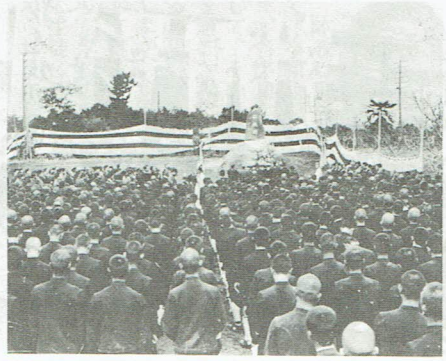
我々の世代は、終戦後間もなく小学校に入学した年代であるが、食糧難を克服してきたせいか、近頃は中年肥りがやたら目につく高校十一回卒業生である。

思い出

見中第七回生

百合山智通

私共が五年生のとき（昭和七年）「全校生徒を一丸とする校旗贈呈」という校史に遺る快挙？がありました。私は今此のことにつき畏友鈴木雪雄君の記憶をもとに紹介させて頂きます。当時は大正天皇の県下行幸を記念して毎年三方ケ原で近隣中等学校の先生・生徒による合同の大分列行進が行われていました。見ると各校夫々に校旗を先頭に堂々とやっているのに我が校には校旗がない。これではいかんと一同思っていた矢先、偶々前記鈴木君が校長室の掃除当番。時こそ今と右のことを尾崎校長に尋ねた処、金がないので作れんとの返事。さらば金があれば作るかと談判したところ、勿論作るという言質を得た。いくら位かかるかと聞くと七〇〇円位とのこと。そこは熱血を以って鳴る彼氏のこと、早速水野豊君ら数名とはかり、一年から五年迄の各クラスを廻って趣旨説明。賛同を得て一人一円を目途としての募金運動を展開。七四〇余円を調達して校長に手渡した。校長は大いに感激してこれを受け取り、製作一切はわしに任せて呉れと云うことで出来上ったのが現在の見中校旗です。以来四十幾星霜、今なお生地も染めもしっかりしていること御覧のとおりです。以上ご紹介迄。



見中第十七回生

木船賢一郎

昭和十二年七月、蘆溝橋事件に端を発し、日華事変が勃発した。町や村には出征する兵士を送る行列が次第に多くなった。翌昭和十三年四月県立見付中学校に入学した。それまでの服装は、夏は霜降り、冬は黒の詰襟りの小倉の学生服・黒短靴・ゲートルの中学生であった。帽子は夏だけ白い日除けをかぶせた。当時としてはハイカラな制服であったようだ。しかし我々から制服が草色に変り金ボタン・開き襟りとなり、ズボンのポケットはすべて縫う事が入学時の学校の指示であった。ポケットに手を入れるなという事である。帽子も同じ草色となって、国防色と呼ばれた。朝夕、教師・先輩上級生に右手の挙手の敬礼を強制的にさせられた。小使室の前の廊下に靴棚があり、裸足になり、冬でも靴下は校内では禁止で、そのためよく凍傷にかかったものである。一週間の授業の中には、必ず勤労作業の時間があり農作業、校庭の草取りをやった。今のように受験に明け暮れるような時代とちがって何となくゆとりがあった。昭和十六年十二月、太平洋戦争が勃発、大きな時代の流れが、我々を包みこんでいった。そして十八年三月、楽しい青春の一コマとも言える五年間の見付中学校時代に別れを告げて、おもいおもいの方角に巣立っていった。

南高第七回生

伊藤正彦

在学が昭和二十年代の後半だからもうふた昔以上のことになる。

厳しい中学時代の規則や高校入試のための補習授業からやっと解放されて、憧れの磐田南高に入学したのである。

当時は、戦後の耐乏生活から立ち直り、いよいよ景気の上昇を感じさせる頃であったが、まだまだ物不足で、自転車置場に並ぶ自転車にも新しいものは数少なかったように記憶している。各種教科の学習内容は一段と高度になって、家庭学習の量も自然に増していったと思う。学習に上限はないはずだが、この時代ほど学習の難しさ、奥の深さを知り、抵抗感をひしひしと感じたことはなかった。

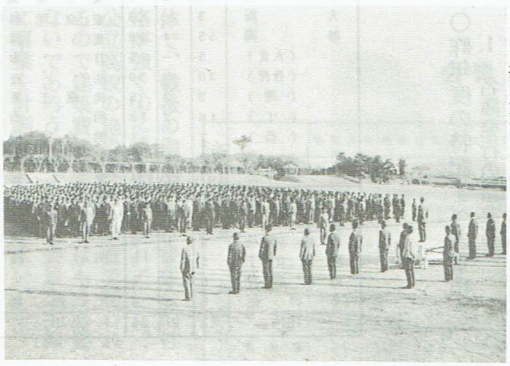
各種行事にもいろいろと思い出がある。校内水泳大会の賞品に市内商店の宣伝を兼ねたものがあったり、体育大会の応援席の飾りつけ、祭り用のハッピ姿も登場した全校マラソンなど、異様な感じさえ持ったものである。又、当時は陸上競技で全国に磐南の名を高からしめ、修学旅行の旅先で「陸上の磐田南ですか」の声を聞くに及び一層の誇りを感じたものだった。伝統の応援歌練習は今もなお続いていると聞いている。

磐南がいつまでも発展し続けていくことを祈りたい。

南高第十七回生

鈴木寛一郎

高校野球は夏の風物詩、汗と泥にまみれて白球を追い、泣き笑いする球児たちの青春群像が多くの人々の共感を呼び、その人気は高まる一方である。私も野球部に籍を置いた高校球児のはしくれだが、華やかさとは縁遠く、他人に語るのも差し控えたい部員だった。



野球をやったのは後にも先にも高校三年間だけ、先輩や後輩にしかられるかもしれないが、磐南だからこそやれた。入部の動機からして、中学で経験もないのに部員が少ないと聴いて飛び込んだ。野球に対する漠然とした憧れみたいなものもあり、みんなが勉強々々と敬遠するなら両立に意地を張ってみようとそんな思い上がりもあった。

センスもパワーもなく、とにかくやれるところまでの、一応は部員組だった。絶対数の不足に助けられて最上級生が抜けると九人の中に入れてもらった。夏の大会の成績は、二年の時が逆転負け、三年がコールド敗けでいいところなく終った。思い出すとほんとうに懐しい一生のよい思い出だ。

文化部活動では文芸部に属し、これまた両立を目指すという欲張り。たぶんにヘソ曲がりなロマンチストであったと思う。

元美術担当教諭

河口淳太郎

私は昭和十八年から二十八年間美術教師として御厄介になりました。当時の学校は戦時色一色に塗りつぶされ芸術的な心のゆとりなどありませんでした。前任校の国分高女より赴任のため磐田駅におりた私の第一印象は黒の肩掛けカバンとゲートル姿の生徒でした。

戦時中は勤労動員で学問どころではなく職員も奉安殿を守るため、夜半の空襲にもゲートルを付けて学校にかけつけなければなりませんでした。

戦後は校庭を堀り起こして食糧を作り飢えをしのぎました。学校は見中から磐田第一高等学校そして磐田南高等学校へと目まぐるしく変化して今日の県下でも指折りの学校に成長しました。懐しく思い出は尽きません。

便り

恩師

○池野早苗（博物）
ご清勝の事と存じます。新らしい名簿を一葉ご割愛出来ましょうか、実費はご遠慮なくご請求下さい。五○年振りに貴校の卒業生から便りがあり、懐しく思いました。

○小野寺直一（生物）
なんといっても見付は第二の故郷。学校卒業して第一番目の勤務先。考えてみれば恥しいことばかりです。小生宿病の糖尿病を治療中で脚腰が弱り歩行も普通でない。まだ七十五才、静養して一度見付の町へも行きたいと願っている。

○小島孝平（英語）
久しくご無沙汰してましたので、同窓会からの便りに見付のこと懐しく思います。現在早稲田大学高等学院に勤めています。関東支部総会には出席させていただき、皆んなと語り校歌を歌うなど、私の楽しみの一つになっています。

○都築　渉（数学）
教師になって最初の担任が高四回生の中学一年生のときでした。クラブはバスケットボール部の顧問で、県大会に優勝した経験があります。現在のバスケット部は如何ですか。同窓会だより創刊号に運動会で煙草火付け競争をしてる写真がのっていますが、私が一番右に写っています。三十年前を懐しく思います。

○畑　光夫（英語）
昭和二十九年初の勤務校で、元気な生徒・親切な先生方と楽しく充実した五年を過ごしました。沼津東高を経て、静岡女子大学十四年目、静岡大学へも出講。学生の中に磐南の卒業生をみると懐しさを覚えます。

○小沢卓郎（国語）
創刊号懐しく拝見させて頂きました。進路状況に三十二年から五十一年までお世話になったその頃の思い出の数々をあらためて回想いたします。おかげ様で元気にすごしております。会の一層のさわやかなうるおみのあるご発展を祈ります。

学校

昭和54年度大学入試合格状況一覧　（55年4月14日現在）

国立大学				私立大学			
大学名	現	卒	計	大学名	現	卒	計
東北	5	1	6	神奈川	37	3	40
筑波	2	1	3	青山学院	13	4	17
東京	4	0	4	共立女子	7	0	7
東京外国語	1	0	1	慶応義塾	8	6	14
東京農工	2	1	3	国学院	9	0	9
東京工業	1	0	1	駒沢	24	2	26
お茶の水	1	0	1	実践女子	4	0	4
一橋	1	0	1	芝浦工業	17	9	26
横浜国立	5	2	7	成蹊	4	4	8
金沢	2	0	2	専修	10	3	13
名古屋	4	1	5	中央	18	10	28
名古屋工業	3	0	3	津田塾	2	2	4
京都	3	2	5	東京電機	6	4	10
大阪	3	−	3	東京理科	25	14	39
静岡	55	4	59	東洋	8	3	11
（人文）	5	−	5	日本	42	5	47
（教育）	30	0	30	法政	23	5	28
（理）	3	2	5	武蔵工業	12	5	17
（工）	16	2	18	明治	19	12	31
（農）	1	−	1	明治学院	10	1	11
その他	15	15	30	早稲田	11	15	26
計	107	27	134	愛知	9	3	12
公立大学				京都女子	5	1	6
東京都立	2	−	2	同志社	7	6	13
都留文科	4	1	5	立命館	23	4	27
静岡女子	5	0	5	関西	9	5	14
静岡桑科	6	0	6				
その他	6	2	8	その他	131	51	182
計	23	3	26	計	493	177	670

事務局

○前年度総会以降の行事
8月　名簿原稿完了・広告原稿集め
9月　名簿発注五、〇一〇冊
10月　名簿販売諸準備
11月　名簿発売通知状郵送
　　名簿二、二五〇冊郵送
　　関東支部総会
12月　名簿購入督促状郵送
　　名簿代金納入督促状郵送
1月　代金納入再督促状郵送
　　本部役員会（慰霊碑）
2月　磐田市役所同窓会
3月　評議員会（名簿・慰霊碑）
　　記念植樹（見中第五回生）
5月　本部役員会（反省会）
6月　総会対策連絡協議会
7月　会計監査
　　評議員会（総会原案審議）

○昨年度の特記すべき事項
1. 名簿発行の諸業務
2. 機関誌の発行（創刊号）
3. 卒業後10年迄の年次役員組織の再編成

○今年度の特記事項（総会迄）
1. 10年会（高校21回卒）の開催
2. 衆議院議員塩谷一夫氏の応援
3. 機関誌第二号の発行
4. 関西支部長を見中第16回生の堀井泰粥氏（医師）に依頼承諾

○今後の業務の重点
1. 関西支部総会の開催
2. 年次会の開催と会費制の確立
3. 各支部活動への助成対策
4. 定時制部会の開催

○今年度の当番年次
10年会　南高第21回生
20年会　南高第11回生
30年会　南高第2回生
40年会　見中第23回生
50年会　見中第14回生
　　見中第5回生

編集後期

第二号をお届けします。早一年過ぎたのかの感です。各当番年次の行事も定着して来ました。当番年次以外の年次の活動や文芸記事も紙面に紹介したいものです。お便り下さい。校内幹事の池谷幸平先生のご苦心とご尽力に感謝申し上げます。

龍泉　公